

# 2011J-0190 広汎性発達障害患者におけるrisperidoneから aripiprazoleへの置換に関する後方視的検討

福井大学医学部附属病院病態制御医学講座精神医学領域<sup>1)</sup>  
平谷こども発達クリニック<sup>2)</sup>  
福井大学医学部附属子どもの発達研究センター<sup>3)</sup>  
福井大学医学部病態制御医学講座小児科学領域<sup>4)</sup>

浅野 みずき<sup>1)</sup>、石飛 信<sup>1)</sup>、平谷 美智夫<sup>2)</sup>  
小坂 浩隆<sup>1)</sup>、水野 智之<sup>3)</sup>、高橋 哲也<sup>1)</sup>  
八ツ賀 千穂<sup>3)</sup>、川谷 正男<sup>4)</sup>、村田 哲人<sup>1)</sup>  
友田 明美<sup>3)</sup>、和田 有司<sup>1)</sup>

【背景】広汎性発達障害(Pervasive Developmental Disorders: PDD)患者では、しばしば攻撃性や過敏性などの随伴症状がみられ、非定型抗精神病薬による治療がなされることが多い。なかでもrisperidone(RPD)は使用報告例が最も多い薬剤であるが、高プロラクチン血症や体重増加等の副作用が生じる可能性も指摘されている。一方、近年aripiprazole(APZ)のPDD症例への使用報告例も増えてきており、RPD投与で懸念される高プロラクチン血症等の副作用が生じにくい点が注目されている。しかし、これまでにRPDからAPZへの置換に関する報告はない。

【目的】PDD患者におけるRPDからAPZへの置換の効果、副作用を後方視的に検討する。

【方法】平谷こども発達クリニックを受診しているPDD患者のうち、2011年4月時点で既にRPDからAPZへの置換がなされていた23例(男16例、女3例、平均年齢 $15.1 \pm 3.9$ 歳)を対象とした。臨床評価尺度としては、Clinical Global Impression-Severity(CGI-S)及びCGI Improvement(CGI-I)scalesを用いた。

【結果】評価時点での平均APZ投与期間は $14.9 \pm 8.4$

週であり、最終の平均薬剤投与量はRPD  $0.7 \pm 0.5$  mg/day、APZ  $2.8 \pm 1.3$  mg/dayであった。RPD投与時とAPZ置換後のCGI-Sはそれぞれ $4.7 \pm 1.4$ 、 $4.6 \pm 1.3$ で有意差を認めず、変化を示すCGI-Iも $3.4 \pm 0.8$ であり、疾患重症度の変化を認めなかった。APZへの置換により、多くの症例で高プロラクチン血症、食欲亢進、眠気の改善を認めた。

【結論】APZはPDD患者の随伴症状に対してRPDと同等の治療効果があり、またRPDに比して副作用が少なく忍容性に優れることが示唆された。